

日本人への祈り

まだ ほう

[東京外国語大学教授] 町田 宗鳳

山好きが昂じて、『山の靈力―日本人はそこに何を見たか』(講談社)という本まで書いてしまった私は、今も暇を見つけては、日本列島各地の山の懐深くに忍び込んでいる。最近、足を運んだ場所は、奈良県十津川村にある玉置山である。

その昔、那智にしきの浦に上陸し、八咫鳥に先導された神武東征軍が、大和に攻め入る前に兵を休め、神宝を鎮めたとされるのが玉置山である。それが史実なのかどうかは別として、たしかに誰だつてそこに登れば、あらたかな神の息吹きを全身に吹きかけられそうな荘厳な山である。

山頂近くにある玉置神社に参拝した日は、折からの小雨で、周囲の山々が霧の中で見え隠れし、いかにも神気が天空から降り注いでいるような不思議な感覚に包まれた。樹齢三千年という神代杉は、あたかも白鬚を長く伸ばした神のごとく、ご神殿の背後に重々しく佇んでいた。

さらに奥にある玉石社は、玉砂利が敷き詰められた小さな空間に、一説によれば隕石という丸い石がひっそりと埋められているだけであるが、そのシンプルさは、まさに日本神道の祖型を二十一世紀の今日にとどめているようで、深い感動を覚える。

十数年ぶりに日本暮らしを始めた私が、かぎりなく「日本への憧憬」を感じるのは、じつはこのような、どこまでもシンプルな空間に身を置いた瞬間である。異境の旅を重ねてきた私の心も、結局は、老古杉に覆われる秘境の山で、二千年のあいだ信仰の対象となってきた小さな石に収束していくらしい。



平安神宮の桜は豪華だし、桂離宮の建築は優雅であるが、「日本への憧憬」を感じるには、いささか人手が入り過ぎている。私の青春時代のほとんど全部を吸い込んでしまった大徳寺の枯山水も、枯淡をてらつて、ちよつと技巧に走り過ぎている。

人間も歳とともに、なるべく飾り物を削ぎ落として、シンプルな存在に帰結していくのが、いちばん幸福なのではなかるうか。たいていの人間が渴望する才能も、じつは厄介な代物なのかもしれない。なまじつか才能があるばかりに、自分が他人よりも優秀であるなどと思い込んでしまえば、それこそ不幸な話である。

長引く不況ですっかり元気をなくしてしまった感のある日本人だが、考えようによっては、今こそシンプル・ライフに戻る絶好の機会ではなかるうか。高級車も別荘も、別段、人間の幸福に貢献してくれるわけではない。われわれを幸福にしてくれるのは、無欲とまではないかないまでも、何事もほどほどに足るを知って、にっこりと微笑むことのできる素朴な心を描いて、なにもないような気がする。

幸福には、一切の理由がいらぬ。理由がいるうちは、ほんとうに幸福であり得ない。これは未だ本物の幸福を味わったことのない私なりの臆測である。

さて私の拙い文章に誘われて、熊野三千六百峰の奥津城にまで思いを馳せてくださった読者には申しわけないが、じつは私がいちばん強く郷愁を覚える場所は、はるか下界にある。それも、どこから見ても垢抜けしない、おでんの温もりがほのかに立ちこめるような居酒屋である。



もう少し正確に言えば、その雑然とした店構えの中で、御機嫌よろしく仲間と語り合う「ほろ酔い加減」の日本人が好きだ。顔が赤らんだぶんだけ、気も大きくなったのだろうか、職場のこと、政治のこと、野球のこと、じつに賑々しく語り合っている。親しき人と心置きなく語らいながら、今日も旨い酒と乙な肴にありつける日本人は、幸せである。

しかし電車の中でも、エレベーターの中でも、あたかも感情のない冷血動物のように黙りこくる日本人は、好きになれない。なにかの会議でも周囲の顔色を見て、なかなか本音を語り出さない日本人も好きではない。

背広とネクタイ姿の日本人が、あの居酒屋で見せる快活さと鷹揚さが、もう少し陽の高いうちから、日本社会に充満してくれば、さぞかし住みやすい国になるだろうにと、つくづく思う。

神代杉のように三千年も生きるわけでもなく、まもなく命絶える人生である。どうして、そんなにしかめツラをして虚勢を張るのだろうか。たかだかドングリの背比べのような日本人同士が、ちよつとばかり目立つ奴がいるからといって、足を引っ張り合うこともあるまい。「ほろ酔い加減」で人を許し、「ほろ酔い加減」で人を祝福してあげれば、ここが極楽である。

少し考えてみてほしい。どこの国に毎日、通勤電車が止まるほど、おびただしい自殺者がいるだろうか。宗教的情緒が希薄になる一方の日本では、落胆という感情が、すぐに自殺行為に短絡してしまいうらしい。かといって、この国に戦争があるわけでも、飢餓がある



町田宗鳳 1950年、京都の俳人の家に生まれる。14歳で出家、大徳寺で20年間修行後、渡米。ハーバード大学神学部修士課程修了後、ペンシルバニア大学にて博士号取得。プリンストン大学助教授、国立シンガポール大学准教授を経て、16年ぶりに帰国。現在、東京外国語大学教授。研究分野は、比較宗教学、文明論、生命倫理。著書は「山の靈力」「エロスの国 熊野」「法然対明恵」など多数。

わけでもない。いささか頑迷な不況が国民を悩まし続けているとはいえ、ほんの二、三時間、飛行機に乗って異国の地に降り立ってみれば、自分の国が素晴らしく便利で、豊かな国であったことを痛感するにちがいない。

通勤電車の不幸は、ほぼ日常化した人身事故による停止だけではない。電車の中でも、ある意味ではもっと悲惨な不幸が繰り広げられている。年寄りが来ようが、妊婦が来ようが、誰も席を譲ろうとしない。

大股を開いて坐る若者に、ほんの少しばかり注意しただけで、衆目の中、殺される人もいたのである。どれだけ狭い空間に押し込められるように暮らしていても、日本人は他者の存在に無関心を装おうことにおいては、世界一進化した国民である。

サンフランシスコの空港で、風体の芳しからぬ三十代の男たちが、税関に呼び止められていた。パスポートに何らかの不備があったためらしいが、それなりの丁寧さで質問を繰り返す係官に、ひどい日本語で悪態をついていた。見るに見かねて通訳を買って出た私は、日本人の品性がいつからここまで落ちぶれてしまったのかと、心強く思いがした。

かつて大樹に遭遇すれば、思わず頭を垂れ、小さな丸石にも手を合わせた日本人のシンブルな心は、いったいどこに行ってしまったのだろうか。「日本への憧憬」は、ほかならぬ「日本人への憧憬」であってほしいというのが、私の切なる願いである。霧に包まれる秘境の山の小さな祠に供えたいくばくかの賽銭にも、じつはそういう祈りが込められているのである。